

防衛のアセスメント

壁 屋 康 洋

Assessments of Defenses

KABEYA Yasuhiro

I 防衛の概念

防衛の概念は Freud (1894) によって症状形成の原理を解釈するために創案された。その後防衛の概念は抑圧と同義に用いられてきた。Freud (1915) によれば、逃れることのできない内的な欲動あるいはそれによる葛藤に退行する手段が抑圧 (repression) であった。抑圧はヒステリーの症状形成のメカニズムとして仮定され、概念化される。同様に Freud (1915) は恐怖症、強迫神経症などの病理の症状形成の背後に置き換え (displacement)、退行 (regression)、反動形成 (reaction formation) などの機制を仮定する。その後投影 (projection)、打ち消し (undoing)、隔離 (isolation) の機制を概念化した Freud (1926) は、防衛を「自我が葛藤に際して役立つ全ての技術を総称」する概念とし、抑圧や他の防衛機制はその下位概念とする。

以後防衛の概念は Freud, A. (1936) によって体系づけられ、自我の主要な機能として精神分析理論に重要な位置を占めるようになる。

その後 Klein (1946) がより発達早期の防衛として分裂を中心とした分裂的 (schizoid) 防衛機制を論じる。そして Kernberg (1976) が Klein (1946) の研究を取り入れ、原始的防衛を定式化、自我と対象関係の発達に伴う防衛の発達論を構築することによって防衛概念は大きな展開を見せる。Kernberg (1976) によって新しく概念化された原始的防衛とは、より発達早期の自我によって用いられる防衛、即ち良い自己表象と悪い自己表象、良い対象表象と悪い対象表象とがそれぞれ統合される以前の段階の防衛である。そしてそれまで Freud や Freud, A. によって論じられてきた防衛は、より発達後期の防衛、良い自己表象と悪い自己表象、良い対象表象と悪い対象表象とがそれぞれ統合された後の、高次の防衛として定式化された。

Kernberg の原始的防衛の研究により、それまで不明な点が多かった境界例の病理が説明されるようになり、防衛の概念が急速に広まった。特に米国では精神分析に限らず、広く精神医学に浸透し、アメリカ精神医学会による診断基準 (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders fourth edition : DSM-IV, American Psychiatric Association, 1994) にも付録として掲載されるようになった。こうして防衛概念が発展して広まるにつれ、心理テストによって防衛を測定しようとする研究も盛んになされるようになる。本稿では、防衛の測定に関する研究を以下に概観したい。

II 防衛の測定の諸問題

防衛概念が展開するにつれ、個々人の防衛を測定したいという欲求が高まった。しかしながら防衛を測定することには、最初から種々の困難が内包されていた。

まず何より、防衛は仮定された構成概念であり、具体物として存在する訳ではないため、視覚的に捉えられるものではない。防衛は、精神分析等の治療におけるクライアントの所作、あるいは症状形成を理解するため、現象として捉えられる行動の背後に仮定された概念である。

尤も心理学の測定においては、その大部分が仮定された構成概念を対象としている。人格あるいは性格はその代表的なもので、広く人口に膾炙され、当然のもののようにさえ感じられるが、人格や性格は決して具体物ではなく、個々人の諸行動の背後に仮定されているだけのものである。

しかし他の諸概念に比し、防衛の測定が困難となるのは、その概念の位置付けの複雑さに起因する。防衛は仮定された構成概念であり、これまた仮定された構成概念である自我の機能として考えられているものである。自我もやはり精神分析の構造論の産物で、Freud (1923) が仮定した自我—超自我—エスの力動関係の中で防衛が働く。諸現象のまとまりとして捉えられる症状を説明するため、(仮定された構成概念である) エスの(仮定された) 欲動に対して(仮定された) 自我の(仮定された) 機能としての防衛がある。数多くの仮定された概念の中に組み込まれたという点で、防衛概念は現象から遠い概念である。加えて防衛は複数のものが同時に合わさって働くことが仮定されている。現象の背後に仮定されていて抽出し難いと同時に、複合体の形で作用するために、純粋な形で個々の防衛作用を抽出することが困難となる。

また一般に防衛は無意識的に作用することが前提とされている。そのため、直接的な質問では問うことができず、防衛作用の確認が困難となる。観察者の側で防衛の存在を想定しても、主体の側に問うて検証することができないのである。

防衛が無意識的な働きであるということは、特に質問紙法によって防衛を測定しようとするときに障害として重くのしかかる。質問紙法によって防衛を測定しようとするときには、意識的な回答を求める質問によって、如何に無意識的な作用を抽出するかが大きな課題となる。

III 質問紙法による測定

防衛を測定する手法には、質問紙法によるものと投影法によるものがある。上述の通り質問紙法による測定では、防衛が無意識的なものとして概念化されていることから、意識的な回答を求める質問によって如何に無意識的な作用を測定するかが問題となる。防衛を測定する質問紙には、Gleser & Ihilevich (1969) による Defense Mechanisms Inventory (以下 DMI と表す) に始まり、Defense Style Questionnaire (Andrews, Singh, & Bond, 1993: 以下 D S Q), Life Style Index (Conte & Plutchik, 1994: 以下 LSI) 等がある。これらの尺度は、意識的な回答で無意識的な作用を測定するという上記の問題に対して、各々異なった対応を行なっている。またそれぞれ測定する防衛の種類も異なり、それぞれに特色をもっている。以下に3種の尺度について、その特徴を述べたい。

1. Defense Mechanisms Inventory

DMIは比較的古くから使用されている尺度であり、防衛を測定する質問紙としては、本邦で翻訳、使用された（長尾，1989）現時点で唯一のものであろう。DMIは1969年に作成されており、Kernbergによって原始的防衛が概念化される以前のものである。

DMIは各種の防衛機制を投影（Projection：P R O）、外罰（Turning against Object：T A O）、原理化（Principialization：P R N）、内罰（Turning against Self：T A S）、転倒（Reversal：R E V）の5種類に分類し、この5種のみを測定する。

投影：自己のもつ否定的感情や観点を自己とは別個の外界に属するものとして知覚しようとすることによって内的葛藤を処理しようとする防衛機制。

外罰：欲求不満を生じさせた現実・外界の対象自体を攻撃することによって内的葛藤を処理しようとする防衛機制。攻撃者との同一化（identification with the agressor）や置き換え（displacement）等が含まれる。

原理化：欲求不満を排除・抑圧し、決まり文句や分かり切ったことなど一般的な原理をこじつけて述べることによって、内的葛藤を処理しようとする防衛機制。知性化（intellectualization）、合理化（rationalization）、隔離（isolation）の防衛が含まれる。

内罰：欲求不満から生じる攻撃感情を自分自身へ向けることによって、内的葛藤を処理しようとする防衛機制。自己批判や自責の念などを強く表現したり、抑うつ感情を伴う自傷行為などが当てはまる。

転倒：実際は否定的・攻撃的感情を抱くはずの対象や事象に対して、それとは逆の肯定的感情や反応を示して内的葛藤を処理しようとする防衛機制。否認（denial）、抑圧（repression）、否定（negation）、反動形成（reaction formation）の防衛が含まれる。

DMIは権威、競争、独立などに関わる葛藤場面を提示し、行動、欲求、思考、感情の4つの水準の回答を求める。回答は全て5択で、それぞれの選択肢が上記の5つの防衛に対応している。言わばP-RFスタディを言語によって表記したような形式であり、葛藤場面への反応を求めるといって、無意識的な防衛メカニズムを捉えようとしている。いずれにせよ項目の表示は、極力具体的な行動レベルに近づけ、被験者にとって回答の価値の勾配がすぐ読み取れない工夫が施されている。

DMIの項目を以下に例示する。

上段にある物語をよく読んで、もしあなたがそのような状況にいたら、5つの項目のうちでそうするだろうと思うものを1つ、絶対にそうしないと思うものを1つ選んでください。

あなたは、道路沿いでバスを待っています。道は昨日の雨で泥だらけです。その時オートバイがあなたの前の水溜まりを通り過ぎ、あなたの服は、その飛ば散りで汚れてしまいました。

(a) その時、あなただったらどんな行動をしますか

1. 後でその運転手を見つけだすため、その人の顔をどうだったかを思い起こす。
2. ニッコリ笑いながら、自分の服の汚れをふくだろう。
3. 運転手に対し、みだらな言葉をはくだろう。

4. 「レインコートを着ていたらなあ」と悔やむ。
5. そのようなことはいつもあると思ってあきらめる。
- (b) その時、あなたに生じるとっさの欲求は
6. 逆に運転手の顔を泥まみれにしたい。
7. その運転手はおそらくいつもこういうことをしていると思うので警察へ訴えたい。
8. 水たまりの近くに立っていた自分のまぬけさに腹が立つ。
9. 運転手に対して自分はかけられても気にしていないと伝えたい。
10. 運転手に道路に立つ者は配慮されるべき権利があると伝えたい。

2. Defense Style Questionnaire

D S Qは、Bond, Gardner, Christian & Sigal (1983) が最初に作成した。その際 Kernberg (1967) による原始的防衛を尺度に取り入れた。これに加えて、成熟し、適応的に作用する防衛の研究を実証的に推し進め得ていた Vaillant (1971, 1975, 1976) の考えに則り、後述する防衛スタイルを成熟の軸に沿って4因子に分割する。成熟した防衛にはユーモア (humour), 抑制 (suppression) など、症状形成の元になるよりも、適応的に作用するもの、加えて比較的意識的になされる機制が含まれている。これら適応的な機制や意識的な機制を防衛に含めるか否かは議論が分かれるところであるが、D S Qはこれらの機制を防衛に含めて測定する。

その後 Bond & Vaillant (1986), Andrewsら (1993) によって項目の修正、項目数の調整、妥当性の検証が行なわれた。Bondら (1983) のD S Qは、全67項目のうち個々の防衛に対応する項目が1～6とばらつきがあったが、Andrewsら (1993) は20種の防衛を各2項目ずつで測定するよう改変した。Andrewsら (1993) は防衛を成熟した防衛 (mature factor), 神経症的防衛 (neurotic factor), 未熟な防衛 (immature factor) の3因子に分類する。

成熟した防衛：昇華 (sublimation), ユーモア (humour), 予期 (anticipation), 抑制 (suppression)。

神経症的防衛：打ち消し (undoing), 偽愛他 (pseudo-altruism), 理想化 (idealization), 反動形成 (reaction formation)。

未熟な防衛：投影 (projection), 受動攻撃 (passive aggression), 行動化 (acting out), 隔離 (isolation), 脱価値化 (devaluation), 自閉的空想 (autistic fantasy), 否認 (denial), 置き換え (displacement), 解離 (dissociation), 分裂 (splitting), 合理化 (rationalization), 身体化 (somatization)。

D S Qでは無意識的作用としての防衛を測定するため、質問項目で直接的に種々の防衛機制の使用を問うことはしない。被検者は防衛の使用に無意識的であるが、防衛機制を用いている状況を他者から指摘されるという認識はあるものと考え、他者から指摘されるという認識を問う形式を採る。(例：「不愉快なことについては、まるでなかったように無視してしまいがちだと、人から言われる。」：否認, 「感情を表に出さないとよく言われる」：隔離)あるいは防衛の派生物、特定の防衛を使用した結果だと想定される状況を質問する。(例：「自分のすることには何でも説明のつく理由がある。」：合理化, 「自分は日頃不当な扱いを受けている」投影) この防衛機制を間接的に問う質問形式のため、Bondら (1983) はこの尺度によって測定されるものを防衛スタイル

ル (defense style) と呼んだ。

3. Life Style Index

DSQが意識的な機制も防衛に含め、測定対象としていたのに対し、LSIではももとのフロイト派の防衛概念に近づくべく、防衛を無意識的な機制に限り、意識的な機制はコーピングスタイル (coping style) として測定対象外とした (Conte & Plutchik, 1994)。

LSIはPlutchikの情動理論に基づいて防衛を8つに分け、各防衛の類似性を加味して円形に配置する。そしてこの8種の防衛を測定することで、個人の防衛のプロフィールを描く。補償 (compensation)、否認 (denial)、置き換え (displacement)、知性化 (intellectualization)、投影 (projection)、反動形成 (reaction formation)、退行 (regression)、抑圧 (repression) の8種の防衛を測定する。そのうち補償は同一化 (identification) と空想 (fantasy) を、知性化は昇華 (sublimation)、打ち消し (undoing)、合理化 (rationalization) を、退行 (regression) は行動化 (acting out) を、抑圧は隔離 (isolation) と取り入れ (introjection) をそれぞれ包含する。

LSIの項目には個別的、具体的なものが多い。(例：「ひわいな冗談を聞くと非常に当惑する。」：反動形成、「旅行に行くときは前もって隅から隅まで計画を立てる。」：知性化、「よく嘘をつく。」：退行) 個々の防衛の使用に際して一般的に生じる状況を問う形式でないために、無意識的作用を抽出できる側面はあるように思われるが、その反面、個々の防衛の得点が高くなるためには複数の個別事象の質問に該当する必要がある。例えば、置き換えでは「ひわいな言葉をよく使う。」、「人込みの中で押されると蹴っとばしたくなる。」、「こっそりと暴力シーンの多い映画を見に行く。」、「車を運転すると、ときどき思わず別の車にぶつけたくなる。」などの項目に当てはまるか否かの2択で回答を求められ、多くの項目に「はい」と答えた方が置き換えの防衛が強いことになる。しかしながら上記の項目は、置き換えとしてはそれぞれ異なった経路あるいは対象を採るものであるが、1つの置き換え経路の使用頻度あるいは強度を問題にせず、複数の経路をもつことを指標とすることには疑問を呈さざるを得ない。尤もこの問題は他の尺度にも該当することであろうが、具体的、個別的な項目数が多いLSIに関して特に問題が大きいように思われる。

IV 投影法による評価

防衛の測定に関しては、投影法による測定法の方が質問紙法より歴史は古い。ロールシャッハ・テストを用いた解釈の研究は多いが、ロールシャッハ・テスト以外のものでも、TATによるもの (Cramer, 1987, 1991) や、SCT形式のDefense Mechanism Profile (Conte & Plutchik, 1994) 等がある。Cramer (1987) は、否認 (denial)、投影 (projection)、同一化 (identification) の順に防衛が複雑になり、発達していくという独自の防衛の発達論を展開し、否認、投影、同一化の3つの機制をTATを用いて測定する尺度を作成した。

またP-Fスタディにおいても、現著者のRosenzweigは3種のアグレッションの方向にそれぞれ防衛を想定し、外罰と投影を、内罰と置き換え、隔離、打ち消しを、無罰と抑圧、合理化を対応させた (住田・林・一谷, 1964)。

V ロールシャッハ・テストによる防衛の評価

ロールシャッハ・テストは精神分析的内容解釈がなされる中で、防衛解釈もその一部としてなされてきた。とりわけ Schafer (1954) は抑圧 (repression), 否認 (denial), 投影 (projection) の防衛および強迫的防衛作用 (obsessive-compulsive defense operations) に関し、反応内容、決定因などによる防衛解釈の指標を提示し、ロールシャッハ・テストによる防衛解釈研究の先駆的存在となった。

本邦においても、小此木・馬場 (1972) が Schafer (1954) の防衛解釈を発展させ、抑圧 (repression), 否認 (denial), 否定 (negation), 誇張 (exaggeration), 分離 (隔離: isolation), 置き換え (displacement), 象徴化 (symbolization), 知性化 (intellectualization), 合理づけ (合理化: rationalization), 反動形成 (reaction formation), 打ち消し (undoing), 投影 (projection), 自己自身への向けかえ (turning against the self), 同一化 (identification), 退行 (regression) のそれぞれについてロールシャッハ・テスト上の表れを提示した。その後、馬場 (1983) は Kernberg (1976) による原始的防衛に対してもロールシャッハ・テスト上の表れを示した。

1. Lerner Defense Scale

Lerner & Lerner (1980) は Kernberg (1975, 1976) の防衛の発達論, 原始的防衛の理論に基づき, 分裂 (splitting), 脱価値化 (devaluation), 理想化 (idealization), 投影性同一視 (projective identification), 否認 (denial) の5つの原始的防衛を測定する評価尺度, Lerner Defense Scale (以下LDS) を作成した。LDSは Mayman (1962) の Scoring System for Form Level や Holt (1970) の Manual for scoring of primary process manifestation in Rorschach responsesなどを基に作成され, 人間反応の反応内容, 主にその修飾語句を採点対象として得点化するものである。Schafer (1954) や小此木・馬場 (1972) がロールシャッハ・テスト上の防衛の表れを示しながらも明確な評価基準という形では示さなかったのに対し, LDSでは明確な基準が示され, 各被検者の防衛の使用が得点化される。

5種の防衛のうち, 脱価値化, 理想化, 否認に関しては, 高水準から低水準までの区分がなされており, 連続して序列の上で評定するようになっている。

LDSは石井・小坂 (1994) が邦訳し, 石井・八木・相田・石原・井上・小坂 (1994) 及び石井・山田 (1997) によって本邦で使用されている。

採点基準の一部を以下に例示する。

分裂

A. 反応の継列において, 明確で, 葛藤的ではなく, 曖昧でない感情的次元の言葉で表現された人間知覚表象のすぐ後に, これとは正反対の感情的次元を示す別な人間反応が続く。例えば, 「拳銃を持った醜い犯罪者のように見える」という反応の次に, 「頬をつけあって一緒に座っているカップル」という反応が続く場合。

脱価値化

1. (5段階中最も高度の水準) 人間性の次元は保たれており、時空間における距離化は認められない。その人物は、否定的な意味合いをもっているが、社会的に容認される言葉で表現される。例えば、(a)「戦っている2人の人間」、(b)「滑稽な衣装を着た少女」といった反応。
2. (2番目に高度の水準) 人間性の次元は保たれており、人物の時空間における距離化は、認められることも認められないこともある。その人物は、著しく否定的で社会的に容認されない言葉で表現される。例えば、(a)「病気にかかったアフリカの子ども」、(b)「排便している女性」、(c)「気味の悪い感じの男性」、(d)「頭のないバラバラの人間」といった反応。

2. Rorschach Defense Scale

防衛の得点基準を設けるにあたり、LDSが人間反応に限定したのに対し、Cooper, Perry, & Arnow (1988) による Rorschach Defense Scale (以下RDS) は、動物反応、無生物反応など全ての反応、及び検査中の態度や種々の言語表現を採点対象とした。RDSはSchafer (1954) やHolt (1970) などを基に、15種の防衛に対して総計132もの採点基準を設けた。

測定される防衛は以下の15種であり、神経症水準 (neurotic)、境界例水準 (borderline)、精神病水準 (psychotic) の3つの水準に分類されている。

神経症水準 高水準の否認 (higher level denial)、知性化 (intellectualization)、隔離 (isolation)、反動形成 (reaction formation)、抑圧 (repression)、ポリアンナの否認 (polyanish denial)。

境界例水準 脱価値化 (devaluation)、投影 (projection)、投影性同一視 (projective identification)、合理化 (rationalization)、万能感 (omnipotence)、原始的理想化 (primitive idealization)、分裂 (splitting)。

精神病水準 軽躁の否認 (hypomanic denial)、大規模あるいは無頓着な否認 (massive or bland denial)。

Lerner (1990) によれば、LDSはより重篤な病理の鑑別に、RDSは比較的軽度の病理の鑑別に有効である。

RDSの採点基準を以下に例示する。

高水準の否認

A. 知覚対象を述べる際、否認的な言葉によって明らかにされた衝動 (自由反応段階に限る) の否認。この例では、知覚対象は形が明確でなければならない。

- (1) 「こうもりではない。」
- (2) 「この人々は互いに怒ってはいない。」
- (3) 「その女性はセクシーではない。」

注) 次のような例は含まない：「私にはただ女性の形のように見えます。肉体的な意味ではなく。」

隔 離

J. 被検者が特定の反応を導きだすうちに進行した、プロセスの報告に向かう傾向が明らかなきとき、自分自身への思考過程への気づきが得点される。これはテスト中に体験したことの内観報告も含む。

- (1) 「この巨大な足が1度注意を引いた。」
- (2) 「腕のようだと言おうとしたのですが、前に腕だと考えたものは…。」
- (3) 「この色は好きですが、何故だかよく分かりません。」
- (4) 「これが何であれ、すぐに私に何かを示します。」

VI アセスメント法の比較検討

現在防衛を測る尺度には上記のもの等があるが、それぞれに特徴があり、また万能なものもない。それぞれに妥当性の検討はなされている (Cramer, 1988, Bond & Vaillant, 1986, Lerner, Albert, & Walsh, 1987, Carr, 1987, Lerner, 1990, Cooper, Perry & O'Connell, 1991)。DSQでは成熟した防衛や未熟な防衛という範疇では一定の妥当性を得ており (Conte & Plutchik, 1994), またLDSやRDSは臨床群の鑑別に有効性を示している (Lerner, 1990, Cooperら1991)。しかし個々の下位尺度が当該の防衛を測定していることの妥当性を、十分に立証できた尺度はないようである。

上述の尺度は、個々の下位尺度の妥当性は完全には示されていないが、防衛の使用を総合して検討した際、臨床群の鑑別などに一定の有用性を示している。防衛の研究が未だ発展途上であることも鑑み、それぞれの尺度に一定の有用性を認めた上で、各尺度の比較を試みたい。

まず質問紙法は何より検査が簡便で、短時間で施行することができる。上記の3つの質問紙法のうち、DMIは投影法に近い形式を採っているため、より無意識的な回答が得られると思われる。しかし一方でDMIは測定する防衛が5種と少なく、さらに防衛の分類も独特で、あまり一般的でない方法に拠っている。またDMIは1969年に作成され、Kernberg (1976) による原始的防衛の概念が導入される以前の内容となっている。

一方、DSQとLSIはより意識的な自己報告に頼る形式である。LSIがより神経症的な水準の防衛ばかり8種測定するのに対し、DSQは適応的に作用する成熟した防衛から原始的防衛まで20種もの防衛を測定対象としている。またDSQは対象とする防衛が多いながらも、質問項目を少なく抑えている。そのため個々の防衛に2項目ずつしか質問項目がなく、検査時間が短くて済む一方で、各下位尺度内の一貫性は統計上どうしても低くなる。これに対してLSIは各防衛に対して10~14項目用意されている。しかし各項目が非常に個別的、具体的であるのは前述の通りである。

ロールシャッハ・テストによる測定法に関しては、ロールシャッハ・テストそのものが曖昧な外的刺激として図版を示し、それに対する適応行動として反応を調べる形式のため、防衛の測定に適していると考えられる。しかし同時に、ロールシャッハ・テストの施行が被検者に負担を課すことは言うまでもなからう。

ロールシャッハ・テストによる防衛解釈の中でも、Schafer (1954) 及び小此木・馬場 (1972)

によるものは、防衛の使用を特定するための指針は論じられているが、防衛の在・不在を決定する明確な基準という形式は採っていない。またこれらの研究は Kernberg が防衛の発達論を展開するより以前の内容のものである。馬場（1983）は原始的防衛を取り入れて解釈の指針を提示したが、明確な防衛の得点化マニュアルはLDS及びRDSを待たねばならなかった。

前述の通りLDSは対象を原始的防衛に限っているため、病理の重い群の鑑別には効力を発揮するが、より軽症の群の鑑別には、幅広い防衛を測定するRDSの方が優れている（Lerner, 1990）。RDSは測定の対象とする防衛が多いと同時に、多くのロールシャッハ・テスト反応を採点の対象とする。この2つの点でLDSより幅広くカバーできると言えようが、その反面総計132もの項目を全てチェックせねばならず、その採点には時間と労力を要する。

LDSとRDS、及び他の防衛解釈法にも言えることだが、それぞれ当該の反応を特定の防衛として判断するには理論的習熟および方法の習熟が必要である。それに加えて臨床的経験全体が背景として重要な意味をもつことを十分考慮に入れねばならないと思われる。

VII 構成概念の妥当性

上記の尺度の下位尺度が、真に当該の防衛を十分取り上げ得ているか否かには、構成概念妥当性の問題も関わる。前述の通り防衛はいわば経験から遠い（experience-distant）構成概念であり、1つではなく、種々の防衛が複合して働くことも仮定されねばならない、複雑な無意識的メカニズムである。尺度の構成概念妥当性を高めることも今後に残された大きな問題である。また概念もより精緻化されねばなるまい。

防衛概念は精神分析理論の中で発展し、広く心理学、精神医学に浸透しつつある。しかし同時に防衛概念そのものが変遷を辿り（壁屋, 1997）、具体的な個人にとっての意味合い、防衛の成否および適応的意味等の点で、更に議論が待たれるところである。

引用文献

- American Psychiatric Association 1994 *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders fourth edition*. Washington, DC: Author.
- Andrews, G., Singh, M., & Bond, M. 1993 The Defense Style Questionnaire. *Journal of Nervous and Mental Disease*, 181, 246-256.
- 馬場禮子 1983 境界例 ロールシャッハ・テストと精神療法 岩崎学術出版社
- Bond, M., Gardner, S., Christian, J., & Sigel, J. 1983 Empirical study of self-rated defense styles. *Archives of General Psychiatry*, 40, 333-338.
- Bond, M. & Vaillant, G. E. 1986 An empirical study of the relationship between diagnosis and defense style. *Archives of General Psychiatry*, 43, 285-288.
- Cooper, S. H., Perry, J. C., & Arnow, D. 1988 An empirical approach to the study of defense mechanisms: I. Reliability and preliminary validity of the Rorschach Defense Scale. *Journal of Personality Assessment*, 52, 187-203.
- Cooper, S. H., Perry, J. C., & O'Connell, M. 1991 The Rorschach Defense Scales: II. Longitudinal Perspectives. *Journal of Personality Assessment*, 56, 191-202..
- Carr, A. C. 1987 Borderline defenses and Rorschach responses: A critique of Lerner, Albert, and Walsh. *Journal of Personality Assessment*, 51, 349-354.

- Conte, H. R. & Plutchik, R. 1994 *Ego defenses: theory and measurement*. New York, Einstein psychiatry publication.
- Cramer, P. 1987 The development of defense mechanisms. *Journal of Personality*, 55, 597-614.
- Cramer, P. 1988 The Defense Mechanism Inventory: A review of research and discussion of the scales. *Journal of the Personality Assessment*, 52, 142-164.
- Cramer, P. 1991 *The development of defense mechanisms. Theory, research, and assessment* New York, Springer-Verlag.
- Freud, A. 1936 *Das Ich und Abwehrmechanismen*. (外林大作 訳 1958 自我と防衛 誠信書房)
- Freud, S. 1894 *Der Abwehr-Neuropsychosen*. (「防衛-神経精神病」井村恒郎・小此木啓吾 他 訳 1970 フロイト 著作集 6 人文書院 7-17.)
- Freud, S. 1915 *Verdrangung*. (「抑圧」井村恒郎・小此木啓吾 他 訳 1970 フロイト著作集 6 人文書院 78-86.)
- Freud, S. 1923 *Das Ich und das Es*. (「自我とエス」井村恒郎・小此木啓吾 他 訳 1970 フロイト著作集 6 人文書院 263-299.)
- Freud, S. 1926 *Hemmung, Symptom und Angst*. (「制止, 症状, 不安」井村恒郎・小此木啓吾 他 訳 1970 フロイト著作集 6 人文書院 320-376.)
- Gleser, G. C. & Ihilevich, D. 1969 An objective instrument for measuring defense mechanisms. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 33, 51-60.
- Holt, R. 1970 Manual for scoring of primary process manifestations in Rorschach responses. Unpublished manuscript, New York University Research Center for Mental Health.
- 石井雄吉・小阪憲司 1994 Lerner Defense Scale By Lerner, P. M. & Lerner, H. D. 横浜医学, 45, 79-84.
- 石井雄吉・八木美穂子・相田葉子・石原学・井上修二・小阪憲司 1994 単純肥満についての心理学的考察 精神医学, 36, 853-860.
- 石井雄吉・山田芳輝 1997 適応障害についての人格防衛メカニズムからの検討 心理臨床学研究, 14, 426-435.
- 壁屋康洋 1997 「防衛」と適応 京都大学教育学部附属臨床教育実践研究センター紀要, 1, 108-117.
- Kernberg, O. 1967 Borderline Personality Organization. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, 15, 641-685.
- Kernberg, O. 1975 *Borderline conditions and pathological narcissism*. New York, Aronson.
- Kernberg, O. 1976 *Object relations theory and clinical psychoanalysis*. (前田重治 監訳 1983 対象関係論とその臨床 岩崎学術出版社)
- Klein, M. 1946 Notes on some schizoid mechanisms. (「分裂的機制についての覚書」小此木啓吾・岩崎徹也 編訳 1985 メラニー・クライン著作集 4 妄想的・分裂的世界 誠信書房, 3-32.)
- Lerner, H., Albert, C., & Walsh, M. 1987 The Rorschach assessment of borderline defenses: A current validity study. *Journal of Personality Assessment*, 51, 334-348.
- Lerner, P. 1990 Rorschach assessment of primitive defenses: A review. *Journal of Personality Assessment*, 54, 30-46.
- Lerner, P. & Lerner, H. 1980 Rorschach assessment of primitive defense in borderline personality structure. In Kwawer, J., Lerner, H., Lerner, P., & Sugarman, A. (Eds.) *Borderline phenomena and Rorschach Test* (pp. 257-274). Madison, CT, International Universities Press.
- Mayman, M. 1962 Rorschach Form Level Manual. Unpublished manuscript, The

Menninger Foundation.

長尾 博 1989 青年期の自我発達上の危機状態と防衛機制との関係 — E C S (ego developmental crisis scale) と DMI (Gleser & Ikhivichs' defense mechanism inventory) を用いて — カウンセリング研究, 28, 1-17.

小此木啓吾・馬場禮子 1972 精神力動論 医学書院

Schafer, R. 1954 *Psychoanalytic interpretation in Rorschach testing*. New York, Grune & Stratton.

Vaillant, G. E. 1971 Theoretical hierarchy of adaptive ego mechanisms. *Archives of General Psychiatry*, 24, 107-118.

Vaillant, G. E. 1975 Natural history of male psychological health. III. Empirical dimensions of mental health. *Archives of General Psychiatry*, 32, 420-426.

Vaillant, G. E. 1976 Natural history of male psychological health. V. The relation of the choice of ego mechanisms of defense to adult adjustment. *Archives of General Psychiatry*, 33, 535-545.

(博士後期課程1回生, 心理臨床学講座)